

重要文化財 源敬公（徳川義直）廟 源敬公墓ほか14棟 保存修理工事について

主任研究員 細谷 豪

1. はじめに

源敬公（徳川義直）廟（以下、源敬公廟） 源敬公墓ほか14棟は、令和4年(2022)11月より令和6年(2024)12月までの約2年半をかけて保存修理工事を行った。また、本工事に合わせて令和6年度に維持管理工事として、重文・獅子の門の木製柱礎盤の取り替え、土間の補修を行った。当協会では本工事において設計監理を行ったので、その概要について報告を行う。



図1 源敬公廟位置図

2. 源敬公廟について

源敬公廟は愛知県瀬戸市定光寺町に所在する、徳川家康の九男で尾張徳川家初代藩主であった徳川義直（慶長5年(1600)11月28日－慶安3年(1650)5月7日）の墓所である（図1）。義直が江戸の麴町屋敷で亡くなった翌年（慶安4年(1651)）、遺命により狩猟で訪れていた定光寺の山内（応夢山）にまず墳墓と石標（源敬公墓）、承応元年(1652)に竜の門・唐門・殿舎（焼香殿・宝蔵）・築地塀、承応2年(1653)には定光寺参道入口に直入橋ちよくにゆうぼしが建てられた。その後、50年御忌にあたり、元禄年間に殉死者の石標、元禄12年(1699)に参道中腹に総門としての獅子の門が建てられ、現在の全容が整えられたと考えられている。昭和12年(1937)8月25日に国宝保存法により国宝指定され、昭和31年(1956)6月28日に文化財保護法により、重要文化財に指定された。（獅子の門は昭和40年(1965)5月29日に追加指定）。

義直は生前、林羅山らと交流を持ち、寛永9年(1632)には上野忍岡にあった林羅山の私塾の孔子廟（先聖殿）の建設を援助し、居館である名古屋城二の丸庭園内に聖堂を建てるなど、儒教に傾倒していた。死に際しても仏式の法名を受けることを拒み、亡くなる前年に林羅山と相談の上、神主しんしゅ（儒教における位牌）を「二品前垂相尾陽侯源敬」と定めた。この神主は石標にも刻まれ、名前の由来にもなっている。

設計は義直が明・杭州から招じて帰化した文人・陳元賛ちんげんぴん（1587-1671）によると伝えられ、儒教の礼制『家禮』に基づく建物配置や形式となっている。全体は禅宗様を基調とした形

式であるが、焼香殿前の二つの階段や各殿舎の銅瓦葺屋根に魚形の正吻や^{せいふん}蕨^{わらびて}手を乗せるなど、中国風意匠が一部にみられ、江戸時代前期における中国建築の理解の実態を示す事例として貴重である。実際の工事には名古屋城にも関わった尾張藩御大工頭の澤田庄左衛門が関与していると考えられている。

廟域は定光寺東方の尾根筋を三段に整地し、軸線上に竜の門、参道、焼香殿、唐門、源敬公墓を配し、その脇に宝蔵、殉死者墓を配して周囲を築地塀で取り囲む構成となっている(図2)。源敬公墓は最上段にあり、円形墳丘の上に石標を立てる形式である。義直の死に際し、5名の家臣及びその家来(前列北から寺尾直政(48)・鈴木重之(32)・志水正昭(30)・土屋元高(60)・鈴木重春(51)(括弧内は没年齢)、後列北から新武屋・馬場・井上・岡田)が殉死しており、殉死者墓として陪葬されている。寛文3年(1663)発布の武家諸法度において殉死が禁止されるが、その直前の武家の在り方を示す事例としても貴重である。

徳川美術館所蔵の『源敬公廟図(定光寺徳川義直廟図)』(17世紀)には築地塀に熨斗瓦積や腰石積が描かれておらず、殉死者墓南にも通用門がない等、現状とはいくつか異なる様子が描かれており、江戸中期以降に何らか大規模な改修があったと考えられる。

これまでの修理歴については以下の通りである。

- ・ 宝暦4年(1754)：築地塀熨斗瓦へら書(名古屋御瓦小屋・名古屋西町瓦屋)
- ・ 寛政8年(1796)：焼香殿床敷瓦へら書(加藤市右衛門)
- ・ 享和3年(1803)：築地塀棟銅板墨書(名古屋札の辻 鋳師□□□□)
- ・ 昭和4年(1929)3月：修理棟札(大工 林治郎 武一郎 季吉)(建物不明)
- ・ 昭和31年(1956)：屋根修理(宝蔵)
- ・ 昭和35年(1960)2月～6月：前年9月の伊勢湾台風による唐門倒壊等の被害の災害復旧
- ・ 昭和45年(1970)7月～46年1月：屋根修理(唐門・焼香殿・獅子の門)部分修理(宝蔵・竜の門・築地塀)
- ・ 昭和47年(1972)：自火報・避雷針新設
- ・ 昭和54年(1979)：消火設備(揚水ポンプ・地下式消火栓等)改修
- ・ 平成9年(1997)11月～11年(1999)6月：部分修理
- ・ 平成24年(2012)4月～3月：防災施設(消火・警報設備)耐震改修(緊急)

3. 対象建造物の構造形式

源 敬 公 墓	石標（周囲石柵は工事対象外）
唐 門	一間一戸平唐門、銅瓦葺、正面石階付
築 地 塀	延長七十一間、銅瓦葺
附 殉死者墓	各石標
附 石 柵	左右及び殉死者墓前（源敬公墓後は工事対象外）

4. 工事概要

（1）破損状況

源敬公墓は万頭形に盛土され、崩れてはいないものの、表面には雑草が繁茂し、南北で植生が異なっていた（写真1）。

唐門は平成9年(1999)に部分修理が行われたが、以降20年以上が経過し、銅瓦葺屋根全体に破損や緩みが生じていた。棧唐戸は藁座の軸にずれが見られ開閉に不具合を生じていた。唐門前の敷石の不陸が著しく、正面石階や左右石柵足元の目地が開いていた（写真2）。

築地塀は一部に桁の転びや軒先の不陸、垂木の脱落が見られ、軒廻り木部の虫害も多くみられた。屋根銅瓦葺の止釘の抜けや緩みも見られ、棟回りの銅板の外れやあおり板等の腐朽が見られた。壁面は軒の出が短いため、概ね下5段程が雨掛かりで目地が削られており、一部に熨斗瓦の破損や孕みが見られた（写真3）。また、殉死者墓通用門の南側の東西の柱は足元が腐朽しており、ほかには殉死者墓北側、東側築地塀の妻面懸魚の唄が破損していた。

殉死者墓は石標大1基が折損しており、小1基が傾いていた。石標基部は万頭形に盛土され芝が張られていたが、生育が悪く、土留めがなくなったことから流れ落ち石標基部が露出していた（写真4）。

石柵は一部傾斜している部分があり、特に源敬公墓正面の両開き扉と殉死者墓西面入口の片開き扉（ともに木製銅板張）は自重から壺金具が変形して傾斜し、開閉に不具合を生じていた。



写真1 源敬公墓全景（修理前）



写真2 唐門前石敷の不陸（修理前）



写真3 築地塀斗瓦の破損（修理前）



写真4 殉死者墓全景（修理前）

(2) 工事内容

敷地の関係上、工事中搬入経路の確保が難しかったため、周囲の徳川氏所有の山林間伐用の林道整備を待って着手し、唐門エリア、築地塀エリア、殉死者墓エリアの3つのエリアに分け修理工事を行った（図2）。当初設計では唐門及び築地塀の銅瓦葺は全面葺き替えを考えていたが、解体すると2～3mm厚の銅板に保護されており、思いのほか銅板や木下地の破損が見られず、築地塀の殉死者墓南塀と東築地塀の取り合いの瓦棒銅板のみを取り替え、あとは再利用するよう計画変更を行った。

墳墓の盛土部分の植生については仕様が明らかでないため、源敬公墓は指定時の写真から苔ではないと判断し、盛土が安定していることから現状の剪定と最小限の芝の補植に留めた。殉死者墓は前回の修理で張った芝がほとんど残っていなかったため、今後の維持管理も考慮して、一年間、苔の植生テストを行い、環境に適したハイゴケとスナゴケを混合したものを採用し、自生の苔を残しながら植栽した。

また、年度毎の瀬戸市主催の現場説明会や地元の公民館等の要望に応じた現場説明会を開催し（写真18）、工事期間中、廟内は立入禁止としていたため、参道入口部分には工事概要や進捗を示す掲示板を設置して情報公開を行った。

唐門と左右石柵は構造補強が難しいこともあり、転倒防止策を講じ、唐門背面の地盤下に重しとしてのコンクリート基礎を設置し、唐門石柱と石柵の頭部にステンレス製巻金物を取り付けターンバックルやワイヤーで引っ張った（写真19）。合わせて唐門下段には立入防止柵（自費設置）を設けた（写真20）。

今回の工事の発見資料としては東側築地塀の野地板に「老束中にわれ」の墨書があった（写真21）。また、源敬公墓西側の築地塀南端の桁の継手には墨書の葵の紋の合番付があった（写真22）。

今後の課題として、源敬公廟は他の近世大名墓と異なり史跡指定されていないため、参道の石垣の崩れや殉死者墓外周の雨水排水不良、廟内の除草等に経費がかかり維持管理が難しいことが挙げられる。また、森に囲まれた環境のため、調査時にマダニの被害にあった。幸い感染症は発症しなかったが、そのおかげで工事関係者には肌を露出せず、十分に防虫対策をとるよう事前に注意喚起を行い、被害を防止することができた。見学等で現地を訪れる際にはご注意ください。



写真5 銅瓦葺の全面解体（唐門）



写真6 下地瓦棒の解体（唐門）

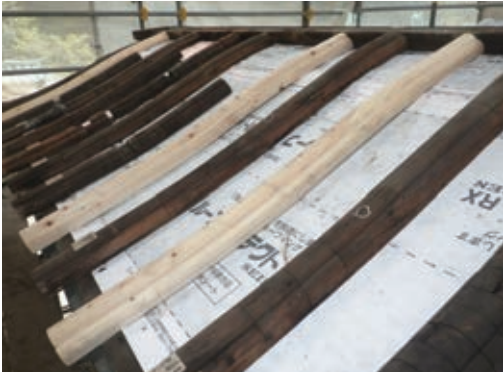


写真7 防水シート張・瓦棒取替（唐門）



写真8 瓦棒間の捨銅板葺き直し（唐門）

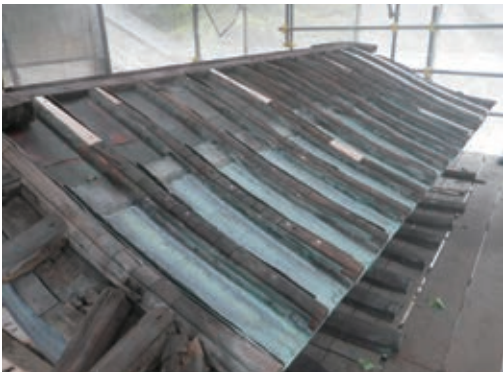


写真9 銅瓦葺の葺き直し（唐門）



写真10 銅瓦葺屋根葺き直し完了（唐門）



写真11 銅瓦葺解体（築地塀）



写真12 二重野地板の解体（築地塀）



写真13 垂木の取替（築地塀）



写真14 野地板の葺き直し（築地塀）



写真15 瓦棒、銅瓦葺の葺き直し（築地塀）



写真16 銅瓦葺屋根葺き直し完了（築地塀）



写真17 築地塀熨斗瓦積解体状況



写真18 令和5年度現場見学会の様子



写真19 唐門及び左右石柵 転倒防止策



写真20 唐門前 立入防止柵



写真21 築地塀野地板の墨書「老束中にわれ」



写真22 築地塀桁継手の合番付（葵紋）

3. おわりに

今回の保存修理工事にあたり、所有者である徳川義崇様、管理をされている株式会社八雲産業の皆様、花井明様、隣接する定光寺を管理している臨済宗妙心寺派宗務本所の皆様、瀬戸市文化課の皆様、工事に携われた田中社寺株式会社他、関連業者の皆様には多大なるご協力、ご助言をいただき、無事に工事を終えることができました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。



写真23 源敬公墓全景（修理後）



写真24 唐門全景（修理後）



写真25 竜の門及び築地塀全景（修理後）



写真26 殉死者墓全景（修理後）

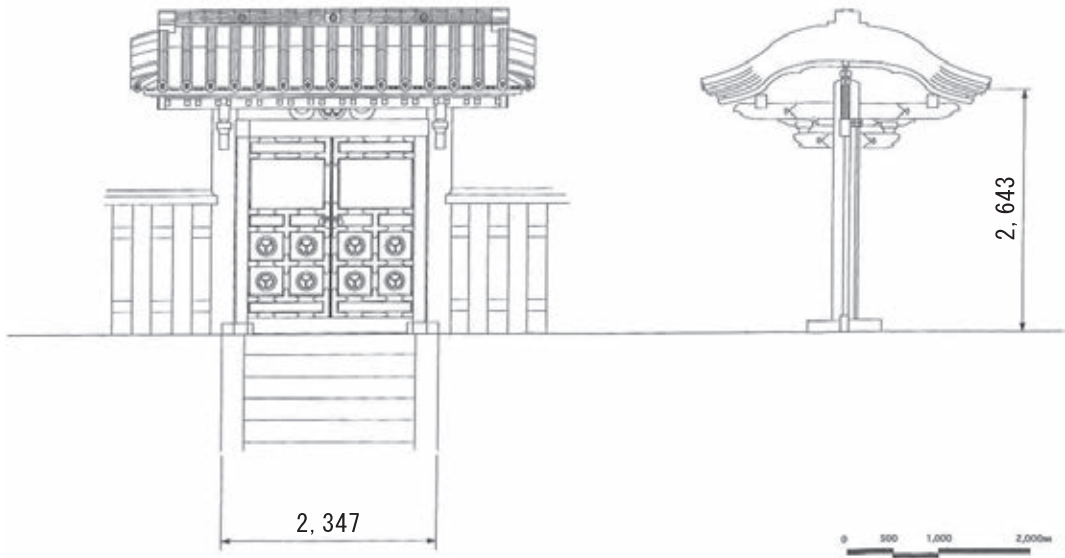


図3 源敬公廟 唐門 正面図及び断面図（『愛知県史』所収図面に加筆）

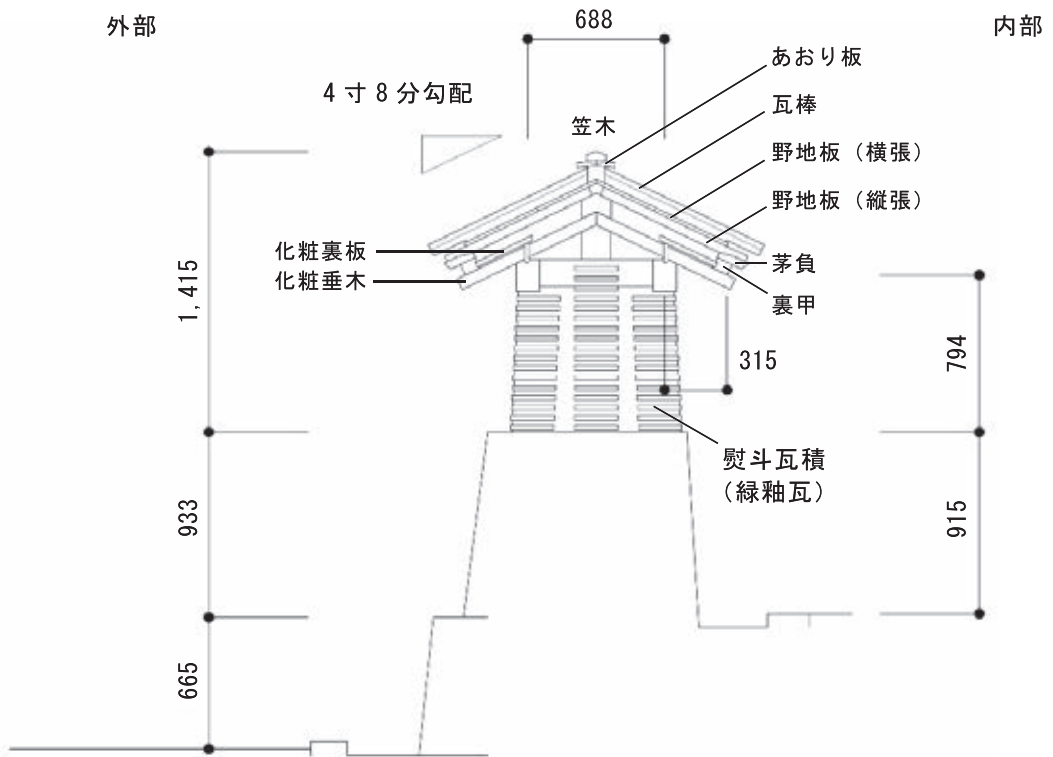


図4 源敬公廟 南築地塀 断面図